

氏名 木下 史青
 ヨミガナ キノシタ シセイ
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第626号
 学位授与年月日 令和2年3月25日
 学位論文等題目 〈論文〉 死の近さー茶の湯の美学と博物館が会うとき
 〈作品〉 どくろ茶会「どくろ茶会」とは博物館の〈負の象徴構造〉である
 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤崎 圭一郎
（論文第1副査）	明治大学	准教授	（理工学部）	鞍田 崇
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	清水 泰博
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	橋本 和幸
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

3. 11からの復興と茶の湯×アートと髑髏 その関係性

「復興と茶の湯×アートと髑髏」その関係性とは何であろうか。

筆者は東日本大震災のあった3・11後、2011年10月から今日まで、福島県二本松や南相馬で、山形で、キエフで、チェルノブイリで、そしてふたたび東京での「どくろ茶会」を開催してきた。ある茶会で用いた髑髏茶碗の意味を問われ、時には抵抗なく受け入れられ、また髑髏のもつイメージから拒否されることもありながら、それでもリクエストがあるたびに発展と洗練を経つつ、いつしか「どくろ茶会」の開催は、「こころの復興」「鎮魂」のための場のデザインになるのでは、という仮説を立てた。

「どくろ茶会」は正式な茶室での茶会もあれば、野原に近い場所でも行われる。茶の湯の目的は、茶を行う「場所」のもつ意味へ祈りを捧げるための自服(じふく)での孤独な茶にある。また、大切な友を祝福し、同席した人々と一時をともにするための茶会には、一座を建立するための幾つかの約束事があるだろう。そのような茶会の持つ時間と空間とは何の意味を持つものなのか、本論文は、その問いに対する回答を明らかにしたい。

3. 11からの被災地における復興期が、日本の社会においてどのような構造であるか、筆者が行ってきた「どくろ茶会」を時系列に整理・考察しつつ、その茶会が茶の湯の価値観を取り込みながら、どのような意味を持ちうるか、その現代的意義を問う。次に、髑髏とは何かについてより深く考察する。「頭骨形の茶碗」を考えるために、脊椎動物の骨・頭骨が〈負の象徴構造〉であるという、かつて生物・解剖学者として東京藝術大学において教鞭をとった、三木成夫の述べるところの意味について検討する。また、人は「髑髏」を通して「何を」見て、どのような価値観・世界観を感得するのか、その仕組みを分析する。

「どくろ茶会」を成立させるための専用の「茶室」がなかったため、〈負の象徴構造〉に相応しい、それ自体が価値を感じさせない、負の素材として発泡スチロールを制作材料として見立てた「ドクロ茶室」と、茶室周辺の露地庭を合わせてデザインした。この茶室と髑髏茶の湯を用い、通常は非公開で行われる「茶事」の如く、しかし完全に公開の場である東京藝術大学大学美術館のエントランスで、筆者が濃茶を練って連客に呈し、回し飲みをすることで、「どくろ茶会」の流れを完成させる。しかし東京藝術大学と美術館から、展示室の使用条件を理由に、茶会の開催は拒否されてしまう。

美術館における茶会開催を拒否する理由は「文化財の保存環境」を守るためである。文化財の「保存と美術館の展示」という、相反する機能を考えるとき、「展示」の本質的な役割に立てば、「文化 culture」の本質を見せることを優先させたいと考えるものである。本論文では、東京藝術大学大学美術館での博士審査展における「どくろ茶会」の顛末を記すとともに、美術館・博物館の本質的な役割を探るため、福島、チェルノブイリ、そして東京…と、ヒトの頭蓋骨の形をした茶碗を携え、各地で茶を点てる「どくろ茶会」と称した茶会を開き、人々との語りあいを続けてきた筆者のこれまでの活動を論じていく。

(論文審査結果の要旨)

本論文でもっとも評価されるべきポイントは、文化や社会のあり方を批判的に論究する際に「負の象徴構造」という視点が有する可能性を見出し、それを実践的に追究した点である。この視点は、直接的には解剖学者の三木成夫の「骨」についての考え方に由来し、本論文では「ドクロ茶会」の現代的意義との関連から、人間の「頭蓋骨」すなわち「髑髏」をどう理解すべきか問うなかで言及されたものである。だが、注意しなければならないが、三木はあくまで「骨」一般についてこの視点を提起しているのであって、ことさら人間の頭蓋骨に限定して論じているわけではない。三木においては、いわばニュートラルな形式的概念にすぎなかった「負の象徴構造」が、本論文では、「髑髏」から連想される様々な文化的・価値的イメージ、とりわけ「死」と重ね合わされ、我々自身の生存、さらにはその生存が営まれる社会空間の根底を裏面からうかがい見るまなざしのロジックとして駆動する。しかも、その駆動力は、あらかじめ設定された枠組みのなかにスタティックに位置づけられているのではなく、福島第一原子力発電所事故以後に取り組みされた茶会と文化財レスキューを通して、筆者自身のひとつひとつの具体的体験とともに実践的に検証されてきた、ある意味生々しさを帯びたものでもある。この点にこそ、本論文の創意があると言えるだろう。ただ、そうした経緯からの創意であるだけに、この「負の象徴構造」が文化や社会に対して有する批判的視座を展開しきれていない面もある。もちろん、「負の象徴構造」としての「茶の湯」の美学を通して、「博物館」（や美術館）のあり方を問い直している点は評価されるべきではある。だが、そもそも博物館や美術館、そこで展覧されるアートをはじめとする造形活動もまた、社会全体から見れば「負の象徴構造」なのではないだろうか。はたしてそうした役割を現状のそれらは果たし得ているのであろうか。これらの点は今後の課題としてぜひ筆者に引き続き取り組んでいただきたい。とまれ、何よりもそうしたさらなる問いかけへの端緒を開いてくれたという意味において、本論文は学術的に十分優れたものであることは言うまでもない。

以上から、副査として、本論文を博士学位請求にふさわしいものとして評価したいと考える次第である。

(作品審査結果の要旨)

木下史青氏の博士研究は、「茶会」の行為を東北大震災に重ね合わせるところからスタートした。当初は自身の所有していた髑髏の現物を原型にした茶碗を制作し、それを使った様々な形式による茶会を東北大震災の被災地やチェルノブイリまで行って行なっていた。その折にはこの活動の先に何が見えてくるのか、茶会記録の集積から何が現れてくるのかを我々は見守っているような感覚であった。その後、氏自身の30年余り前の

東京藝大・学部時代の三木成夫氏の「生物」の講義体験が研究に加味されることによって研究は面白い展開を見せ始めた。私は副査として少し離れた立場で見てきたのだが、この三木氏の講義内容が研究に加わることによって何か繋がったのを感じた。三木氏の骨に対する独自の解釈が髑髏に繋がり、それが茶碗へと繋がると同時に、その後の茶室へと繋がるポイントにもなったように思われた。

博士展に展示された主な作品は①濃茶席「ドクロ茶室」（発泡スチロール製）、床、釜等、②ドクロ茶碗他茶道具一式、③薄茶席・立礼卓、④庭としての造作物2つであり、多くがドクロもしくは骨をイメージさせるもので構成されている。

博士研究発表の折には常に研究の契機であった東北大震災のことが語られるのであるが、上記のような新たに見えてきたテーマによりフォーカスすることでも良かったのではとも思えた。それは震災とは直接関係のない「髑髏」が次第に大きなテーマとなってきたからである。

作品①の「ドクロ茶室」は自身所蔵の髑髏を忠実に巨大化して再現したもので、その特異な造形は茶室の意味の一つの解釈のようにも思える。茶の世界には「一期一会」という言葉があり、また利休の茶の世界にも「死」をイメージさせるものが見えがくれすることもあり、作品として茶と死との関係をテーマとするのは面白いのではないかと思った。このドクロ茶室とその道具類は藝大美術館の博士展において、ロビー空間に強烈な印象を残し、通常の畳との組み合わせは、日常の先に常にある「死」をイメージさせるもので、インスタレーション作品として成功したものであったと思う。

死を意識せずにはいられないドクロの茶室で、ドクロ茶碗が使われる茶会で何が語られるのか。本当はこの茶室と道具類を使って行なわれる今後の茶会において、亭主と客のあいだにどのような会話が交わされるのか。この設えによる亭主の問いかけに対して客が何を考え、何を語るのかを聞いてみたい気がしている。その茶会の記録の集積が本研究の次のテーマにも繋がっていくように思われるのである。より深い「死」に対する対話の場としてこの茶室が使われていくような、この研究の継続を期待している。

以上のことを鑑みて、本作品は博士学位に相応するものと評価する。

(総合審査結果の要旨)

木下史青は、東京藝術大学で教授として教鞭をとった解剖学者、三木成夫が脊椎動物の骨を筋肉の支持体ではなく、成長する肉体の隙間に生まれた「負の象徴構造」として捉える見方を受け継ぎ、ヒトの頭骨（どくろ）を負の象徴構造と捉え、2011年から頭骨をモチーフとした茶器を使った茶会（のちにどくろ茶会と名づける）を東京や福島県などで開催した。木下は2011年の東日本大震災で被災した美術館で美術品のレスキュー活動に参加することをきっかけに、原発事故からの復興のなかで隠蔽されていく死への意識を再び研ぎすまし、それを生への渴望へつなげていく手段としてどくろ茶会を行っていく。原発事故後、福島第一原発は日本の経済発展の「負の象徴構造」として廃炉と復興の過程のなかで機能していくこととなることを、木下はどくろの「負の象徴構造」と重ね合わせて茶会という場で表現していく。茶の湯という伝統的な儀式を批評的に使い、五感で感じる一期一会の緊張感を現代の日本が構造的に抱える問題につなげ、人の意識に介入しようとするその試みは極めて独自性の高いものであり、また野心的な試みと評価できる。

博士審査展で発表したどくろ茶会はこれまでの活動の集大成であり、ドクロをモチーフにした破調ともいえる茶器・茶道具・空間をしつらえることで、現在では趣味人の余興となっている茶会を生と死を見つめる空間として提示することに成功していた。博士審査展は水場の問題などで開催が難しい美術館で茶会を行った。その意義は、生産・消費・破棄の繰り返しによる止めどもない成長で肥大化する現代社会の中で、芸術品が美術館・博物館の中でアーカイブ化されていくことが、まさに肉の隙間に骨が形成されるのと同様の「負の象徴構造」であることをも暗示し、現代社会のなかで芸術のあり方に対しても問いを投げかけるもの

であった。アートの文脈の中に茶会を位置づけて、そこから望ましい未来のあり方に議論を投げかける木下の研究成果は非常に斬新で現代社会にとって刺激なものであり、よって博士学位に相応するものとして評価する。